

mediopos 12

2015.8.19 ~ 2015.9.12

【神秘学ポエジー～風遊戯 第29集】

media-photo-poesie ヴァージョン

mediopos276-300

神秘学遊戯団



■若林幹夫「地図の想像力」(河出文庫 2009.2)

「ジャン・ボードリヤールは『シミュラクルとシミュレーション』で、ホルヘ・ルイス・ボルヘス『汚辱の世界史』に収められた次のような物語の断片に言及している。ある帝国で、皇帝に命じられた地図師がきわめて精確な帝国の地図を作り上げた。その地図は精確であるだけでなく、大きさも帝国とそっくり同じだったので、帝国の領土をそっくり覆い隠してしまった。やがて時がたつにつれ、地図は次第に朽ちてぼろぼろになってゆく。そして同じように、帝国の国力もまた次第に衰えていった。かくして今では数個の地図の断片だけが、砂漠と化したかつての帝国の領土の上に、僅かに痕跡を残している……。」

「ボルヘス＝ボードリヤールによるこの「寓話」では、地図に写し取られた側の世界が逆に、地図を模倣し始める。そこでは地図は世界を写し取るのではなく、世界の側が自らの上にそれを重ね合わせることによって一つの領土、一つの帝国を生み出す「原型」のようなものとして機能している。帝国が減るから地図が破れ綻びてゆくのではない。地図が破れ綻びることによって帝国が減ってゆくのだ。／ボルヘス＝ボードリヤールの寓話においてこの逆説は、地図が領土と同じ大きさ、一分の一の縮尺を持つことによって成立しているように見える。言うまでもないことだが、縮尺一分の一の地図など現実には存在しない。とすれば、この挿話はたんなるおとぎ話が寓話にすぎないのだろうか？／「そうではない」というのが、この書物の主題である。実際に人間がこれまで作ってきた地図も、私たちが現在普通に目にする様々な地図も、みな「帝国の地図」に比べればきわめれ小さな縮尺しかもたない。にもかかわらず、というよりもむしろそれゆえに、地図を描き、また読み取る時、私たちは繰り返しこのボルヘス＝ボードリヤールの逆説を生きていること。そのような逆説を共同で作出し、その逆説を生きていることが、人間の世界経験、社会経験のある本質的な部分をなしているということ。それゆえ私たちが生きる現代の世界もそうした逆説の一つの様式として理解することができるのだということ。本書を通じて考察されるのは、地図という表現と人間の世界経験、社会経験との間の、こうした一見すると逆説的な関係の構造と軌跡である。」

鶏が卵を生むように
世界が地図を生むのか
卵が鶏を生むように
地図が世界を生むのか

全体が部分を生むように
神様が人間を生むのか
部分が全体を生むように
人間が神様を生むのか

鶏と卵は
虎バターのようになって
やがて美味しい
親子丼ができましたとさ



■菅原教夫『ボイスから始まる』（五柳書院 2004.11）

「美術家として出発したボイスは、やがて社会彫刻の名の下に社会の改革を唱えるようになった。」

「ボイスの発言をつぶさに追っていくと、彼がもっとも重視した「自由」の理念は、(…)イエス・キリストの教えに根ざしていたと想像される。しかし、この「自由」の理念は、形骸化していく教会制度のなかではなく、むしろ西洋の科学的精神の発展のなかに実現をみた。実際、その先端において封建制度を打破するブルジョワ革命は達成され、社会主義革命を準備したマルクスにしても、若いころは社会学でキリスト教の理念を発展させようとした。ところが、プラトン、アリストテレスに始まる科学的思考は、近代に入って実証主義の精神に基づく分析的な方法を一層研ぎ澄ませ、この方法の習熟なしに成果をあげることができないことから、科学はおうおうにして論理の前に屈せざるをえなくなった。近代の発展を担った科学的思考がキリスト教精神の発展を担い、自律性を重視したことは、その代償としてエゴイズムを生み、人間は次第に孤立するようになった。こうして人間同士を結びつける理想的な関係、友愛の精神は徐々に失われていったのである。／人間の置かれた状況をこう分析したうえで、ボイスは現状の改革を企てようとする。その実践こそが社会彫刻であったが、彼にとって、論理に制約されず、自由を完璧な形で実現するのは、シラーが言ったような高次の意味での遊戯的な行いにおいてである。人間が真の人間になれるのは端的に言えば遊戯においてだけなのであり、アートこそはその遊戯的性格によって、人間をかつてない自由獲得に向かわせる。こうした考えは彼が敬愛したシラー、シュタイナーに一貫している。」

「社会彫刻を実現するうえで、ボイスは狭い意味での芸術を投げ捨てた。そして「全ての人間は芸術家である」という意味での芸術、すなわち「拡張された芸術概念」を唱えた。けれども、彼は芸術固有の直感、本能の働きこそが、理性主義の世界の陥穽をを脱し、人間性を高めるうえで最高の武器となることを他方で強調した。「芸術」の放棄と「芸術」への固執——ここには矛盾ではなくして、二つの意味が働く場の違いを見るべきである。／キリストをエネルギー源に、芸術で社会改革を図り、人々を友愛の精神のもとに結び付ける」こうした思想にボイスは殉じた。それは余りに理想主義的であり、彼の過激な発言は時にクレージーとも映ったが、しかし芸術はいつの時代も現実と闘ってユートピアを目指すものだ。「パラツォ・レガレ」が聖遺物のように眩しいのは、その困難な殉教の道を伝え、私たちがこうありたいと思う地点に向けて人々を駆り立てるからである。」

社会は彫刻され得るか
社会は改革され得るか

社会は芸術たり得るか
社会は自由を求めるか

遊戯のない自由はなく
自由のない芸術はない

精神のない芸術はなく
精神のない科学は死だ

檻のなかの芸術を去れ
檻のなかの自由を去れ

社会の檻を投げ捨てて
精神の自由を謳歌せよ

mediopos-278

2015.8.21



■新保祐司『フリードリヒ 崇高のARIA』（角川学芸出版 平成20年3月）

*フリードリヒの絵画の画像は、順に次の通り。

海の月の出／リーゼンゲビルゲ山の朝／月を想う男と女／氷の海（希望号の難破）／樫の森の修道院

「フリードリヒの絵について考えをめぐらしていると、どうしても無限という言葉が頭に浮かんでいる。」

「『無限』とは、『深み』であり、それは『狂気』に接している。そして、フリードリヒが交わったドイツ・ロマン派の詩人、作家たちの理論的支柱であった批評家、フリードリヒ・シュレーゲルは『断片』（イデー）の中で、次のようなアフォリズムを書いている。／無限なるものと関係をもつことによるのみ、価値豊かな内容と効用は生まれる。無限に結びつかないものは、まったく空疎にして無用である。／固有の宗教を、つまり無限なるものについての独自の見解を示している者のみが、芸術家と呼ばれるに値する。／たしかに、フリードリヒは、このような『無限』を描いたことによって、『芸術家と呼ばれるに値する』者であった。」

空の彼方に無限を見る

海の彼方に無限を見る

たとえ廃墟に過ぎないとしても

彼方には確かに無限がある

狂気さえもそこに秘めながら

無限を見る者は

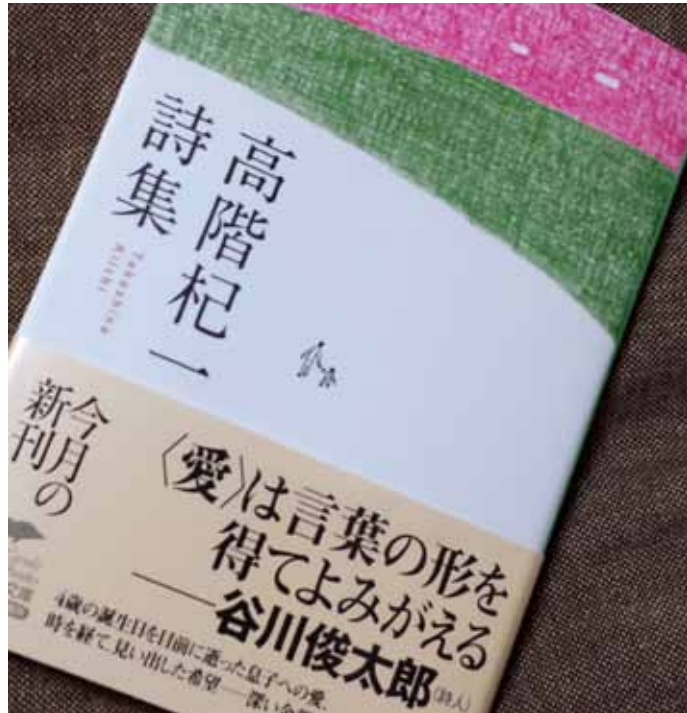
無常のなかをさすらい続け

そこに永遠を見出す者だ

無限を見る者は

みずからを見る者だ

自らの深みへと向かう者だ



■『高階紀一詩集』（角川春樹事務所 ハルキ文庫 2015.8）

「（準備）待っているのではない 準備をしているのだ 飛び立っていくための／見ているのではない 測ろうとしているのだ 風の向きや速さを／初めての位置 初めての高さを／こどもたちよ おそれてはいけない この世のどんなものもみな 「初めて」から出発するのだから／落ちることにより 初めてほんとうの高さがわかる うかぶことにより 初めて 雲の悲しみがわかる」（『空への質問』1999より）

「（蒼穹）空の一郭に／鋭く切裂かれた場所がある／肉と呼ばれるものに／肉以外の存在を またその意味を／ひととき憶いださせるために／肉と呼ばれるものの内に／そのわずかな空白に／沁みいるような青さがそっと／流れ込むように」（『漠』1980より）

いつも
初めて

痛みも
初めて

喜びも
初めて

だから
こわい

だから
跳ぶよ

ひとり
歩くよ

そして
泣くよ

そっと
泣くよ

でもね
笑うよ

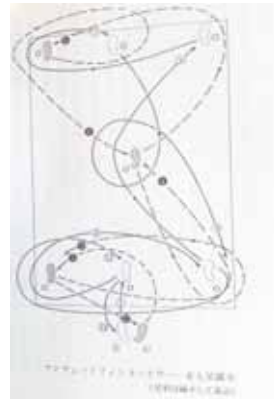
でもね
怒るよ

いつも
初めて

だから
ここで

mediopos-280

2015.8.23



星を踏む
天を象り
地に刻む

地を歩む
天を象り
星を写す

天を地に
地を天に
秘儀の舞

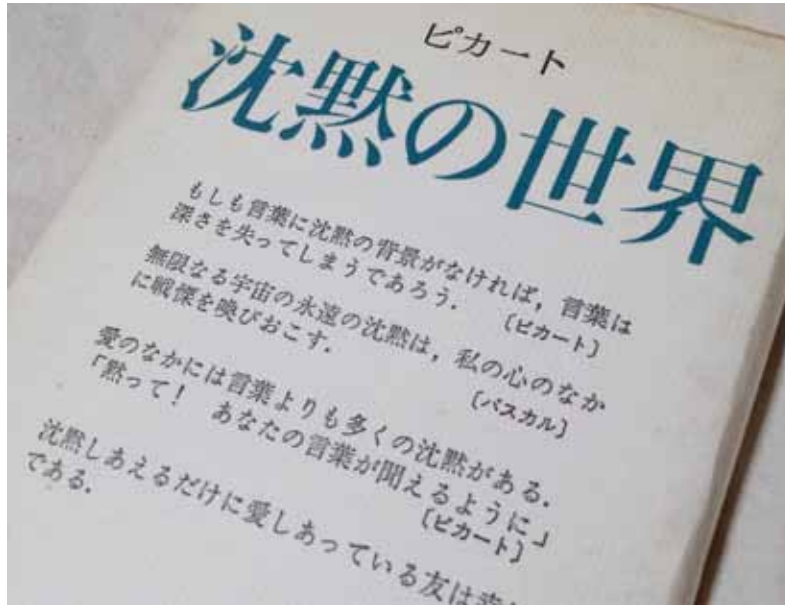
我が歩み
何を踏み
何を刻む

何処より
何処へと
向かうか

天と地を
往還する
秘儀の生

■十文字美信『澄み透った闇』(春秋社 昭和62年3月)

「 Yao族の伝説によると、十二～三世紀に彼らの祖先は中国大陸洞庭湖洞庭湖近くの山岳部に集落を形成していたが、それ以前の遙か昔は現在の南京周辺に住んでいたらしい。漢人との武力衝突で南京を追われた Yao族は、現在の浙江省を経ていったんは東シナ海へ逃れた。台湾海峡を通過し、南シナ海まで流れ、広州あたりから再上陸した後、洞庭湖近くの山中に逃げ込み、そこから分散移動した一群れの集団は雲南を通過してラオス・タイ国境近くの山岳地帯へ入った。私が直接 Yao人から聞いた話である。いまここであらためて彼ら Yao族の数千年の旅の足跡をたどってみると、興味ある事実に気がついた。出発点である南京から現在の地であるラオス・ビルマ・タイ三国国境地帯まで Yao族の言い伝え通りに線を結ぶと、北斗七星のあの独特なひしゃくの形があらわれたのである。天上玉皇大帝や太上老君、三清兄弟神など古代天文思想から生まれた神々を祭祀する Yao族の移動した軌跡が、巨大な柄つけ柁である北斗七星の形を描いているのは、たとえそれが偶然であれ、いや偶然であればなおさら面白い。北の天空に輝いている北斗七星の第二星と第一星を結んだ延長上に北極星が見つられるように、中国大陸とインドシナ半島北部にかけて描いた Yao族の北斗七星も第二星と第一星を結んだ線を伸張すると北極星へ行き当たる。やはり同じように北を指向しているのだ。 Yao人の地上における最も重要な体験は、地上に降ろした北斗七星を踏み渡る Yan・Chett・Finn・Kon・Tou (走七星羅歩) であるから、数千年の時を使って彼らは巨大な北斗七星を地球の表面に描き、また足下に置き直した小さな七星をも同時に踏み続けてきたことになる。」



■ピカールト『沈黙の世界』（みすず書房 1964.2）

「沈黙を失った人間は、沈黙とともに固有の一つの性格を失っただけではない。人間はそのために自己の構造全体において変質されてしまったのである。」

「人々は沈黙が失われてしまっていることに気づきさえもしない。それほどにも万事は、かつては沈黙があったその場所で、もろもろの事物により占拠されてしまっているのである。（・・・）／万事が直接の収益をあてにして仕組まれているこの現代世界のなかでは、もはや沈黙の占めるべき席は残されていない。沈黙は儲かるものではなく、ただ存在しているだけのものである。だから追っ払われたのである。沈黙は何の意味もないものと思われたのだ。沈黙からは何もかも出ては来なかった、つまり非生産的だったのである。」

「言葉は、沈黙との連関をうしなえば萎縮してしまう。だからこそ、今日ではすっかり蔽いかくされている沈黙の世界を、われわれはふたたび明らかにせねばならないのだ。――それも、沈黙のためではなく、言葉のためなのである。」

沈黙を忘れた言葉は
他の言葉を聴くことができない
言葉は器を失っているからである

沈黙を忘れた言葉は
工場生産物に過ぎない
部品が組み立てられ出荷される

沈黙を忘れた言葉は
賛成か反対かに分かれて争う
賛成も反対も互いを知らない

沈黙を忘れた言葉は
みずからの無知を知らない
知識と知恵の違いがわからないからだ

沈黙を忘れた言葉は
祈りを失っている
いつも何かを求めて彷徨うだけ

沈黙を忘れた言葉は
愛を知らない
ひとりであることができないからだ

沈黙を忘れた言葉は
詩になることができない
言葉を超えてゆくことができないからだ

mediopos-282

2015.8.25



■畑山博『地上星座学への招待』（NHK出版 生活人新書010 /2001.11）

「世界中の砂漠や森や大地に無秩序に散らばっているだけのように見える湖たちの多くが、何と天の星座の形に並んでいる！／それも一つや二つの話ではない。世界中の二十を超す湖水群の湖たちが、美しい「白鳥座」や「駁者座」、「双子座」、「獅子座」、「カシオペア座」などの姿そのままに、地上に刻印されているのだ。／地上の湖水一つずつの主な湖が天の星座一つずつに呼応し、互いに余計な星も湖も一つもない。見事すべて使い切ることができるもう一つの地上星座がある。／重ねていえば、天の星座と呼応しているのは、湖水ばかりではない。「万里の長城」をはじめとする世界の大遺跡、文明発祥地の古代都市分布なども、見事に星座に呼応している。／南米ナスカの地上絵は、実に性格に抽象化された全天星座図である。六、七世紀、日本で平安京が確定するまでの間の動乱期、この国の首都として造られた宮々をピックアップし、線で結ぶと、そのまま古代中国の星座図「井宿」、「參宿」の形になる。おまけに同じ時期塞外としてしばしば大和勢の侵略を受け、戦った主要要塞集落の場所を線で結ぶと、見事な「おおいぬ座」の姿が浮かび上がってくる。／この三つの星座は、奇しくも並び星座である。「双子座」「オリオン座」「おおいぬ座」三つの星座を掲げた経度五～八、天の赤道域は、今夜も妖しい歴史の謎を秘めた星光を、地上に投げかけている。」

相似性のように
天と地は呼応し
湖たちを形作る

星座は
地を織りなし
人は地を歩み
星に祈る

相似性のように
神と人は呼応し
何を形作るのか

人の子は
地へと降り立ち
人は聖霊とともに
地を天へと変容させる

mediopos-283

2015.8.26



■伊東乾『なぜ猫は鏡を見ないか？／音楽と心の進化誌』（NHK ブックス 1201 2013.1）

「側壁反射…… ケージはこの観点を持たなかった。「無響室」を「外界と遮断され、響きのない部屋」と考えたケージは、それでもおのれ自身が発する「存在の雑音」ノイズに、この小部屋の中で実存的と言わなければならない形で出会った。だが、この部屋本来の目的は「中にあるモノの発する音は室内で反射しないこと」にある。（…）禅、冥想、沈黙……内面に沈潜して受け身で「音の中」を聴こうとしたケージは、無響の中で自らが発音源となったとき、反射音がまったくなく、そこで自己定位の感覚を喪失しやすくなるという事実をさして深める事なく、無響室を通り過ぎ、「沈黙」の思索へと沈潜していったのだ。（…）音の鏡があるから、私たち生命は自己を定位することができる。おのれ自身という意識も持つことができるし、魚群は一斉に翻った。だがケージの沈黙は、原初のノイズには気がついて、それと響き合う音の合わせ鏡の概念が不足していた。自らが発する響き、おのれ自身の声を聞くことで「自己を意識する自己」人間が立ち上がる部分が抜け落ちていた。」

「なぜ、目にして耳にしても、なぜ片方だけにシグナルを入れたほうが、言語など複雑な情報を認知しやすくなるのだろうか？ 考えられる一つの理由は、脳内で行われる演算処理が高度なことだろう。目や耳など末梢から入力された情報は、中枢神経系の複雑な処理を経て、言語の高度な意味をもって意識にそれと認識される。そうした処理には時間もかかるしエネルギーも食う。あらゆる生物は常に高い経済性をもって世界を認知しているが、ここでも二つの目や耳から入ってくる情報の片側については、早い段階で処理しなくなってしまう。つまりスイッチオフして、余計な情報処理のエネルギーを節約していると考えられる。」

「では私たちはどうして、目や耳を二つずつ持っているのか？ 一つは立体的な空間の認知、さらに言えば環境内での自己定位にステレオ視・ステレオ聴が有効だからだ。望遠鏡では立体視は困難だが、双眼鏡を使えば私たちは容易に奥行きを知覚することができる。「アバター」など3D映画では立体めがねをかけ両目で作品を見なければ奥行き感は見えてこない。聴覚も同様だ。」

「側壁反射という「音の鏡」、そして「単耳聴／両耳聴」のスイッチング。いままで音楽を考える上で陽には考慮されにくかった二つの観点を手にしたことで、多くの秘密がクリアに見えるようになってきた。これら二つは決して独立したものではない。実際には「音の鏡のゆがみ具合」によって、私たちが聴く世界像は幾重にも異なったものになる。キーワードは「対称性」と、その「破れ」だ。（…）／より強く悟性に訴えるためには、声は片耳に偏って聞こえるほうが望ましい。つまり聞き手の耳にとって対称性が大きく破れた音の場、「ゆがんだ音の鏡」が有効だ。だが宗教儀礼には葬儀のような理屈を超える局面が数多い。そんなときには胎内の赤子のように、大きな丸い響きで会衆の全体を抱くような「対称性の高い音の鏡」一様な音響空間が有効だ。」

私はひとり
それともふたり
ひとりでふたり
ふたりでひとり

私はみずから音を発し
みずからが聴き取り
鏡と響き合いながら
みずからを立ち上げる

私はどこにいるのか
世界のなかにいるために
ひとりでふたり

目はふたつでひとつ
耳もふたつでひとつ
対称なのにずれている

ひとつの目は平面を見る
平面にはゆがみがない
ふたつの目は奥行きを見る
奥行きは悟性を超える

ひとつの耳は時間を聞く
まっすぐに進む時間
ふたつの耳は奥行きを聞く
奥行きは悟性を超える

ひとりでふたり
ふたつでひとつ
右と左でひとつ

世界は対称性を生み
対称性を破り
幅と奥行きを曲芸で
時空を展開させている

mediopos-284

2015.8.27



■川村湊『言霊と他界』（講談社 1990.12）

「柳田国男は「他界」という外部を、あたかも内部のものであるかのように引き寄せてみようとした。折口信夫は逆に内部的なものを絶対的な外部としての「他界」のほうへ振り向けようとしたのである。そうした対比の中でいえば、南方熊楠はわれわれの考える限りの「他界」が、この世界から何ほども遠離っておらず、現世とぴったり背中合わせになった世界であることを、そのままの形で証明してみせてくれたのである。つまり、熊楠自身が、そうした内部と外部との関わりでいえば、半ば外部、半ば内部という「中有、の領域にいたのであって、彼はすでに「他界」に片足以上をかけていたといってもよいのである。」

「南方熊楠の民俗学には、そもそも霊魂や他界についての本格的な論考はなく、柳田や折口が「他界観念」を追求することをその最後の課題としたような意味では、彼はそうしたテーマを持たなかった。しかし、熊楠は日本人にとって「霊魂」が何であり、「他界」がどんなところであるかは、その生活経験のレベルにおいて、きわめて明瞭に洞察しえていたといえることができるのだ。／それは「家」や「家族」から離れた人間が、そうした家郷へ戻ろうとするノスタルジーの強さであり、そしてそうした郷愁は、現実の世界においてはほとんど叶えられないということだ。先祖から子孫への美しく、うるわしい連続性もなければ、この世界とは絶対的な懸隔を持った精霊世界も、言葉で作りあげられた幻の世界以外にはありえない。現実の世界はあくまでも「他界」という非現実世界をも、現実化する。つまり、そこでは霊魂は、単なる妄執の亡霊であり、他界はこの世界と空想的な往生の世界との中間にある、まさに「中有の闇」ということにほかならないのである。」

あの世はどこにある

この世の外にあるか
この世の内にあるか

この世の外はどこにある
この世の内はどこにある

この世の外とこの世の内と
つながってクラインの壺となるか

この世はどこにある

私の外にあるか
私の内にあるか

私の外はどこにある
私の内はどこにある

私の外と私の内と
つながってクラインの壺となるか



■藤沢令夫『世界観と哲学の基本問題』（岩波書店 1993.5）

「人間はこの世界に生まれて、生きて、さまざまな行動をして、死んで行く。そしてできるだけよく、あるいは有効に行動するために、自分がその中にある世界のあり方を知ろうとする。そこにおのずから、一定の世界の見方、つまり自然観や宇宙観や人間観とも重なり合った「世界観」と呼ばれるものが形づくられ、そしてそれは基本的には、人間自身がいかにかに生き、いかに行動すべきかというこの指示と一体的、あるいは相互含意的である。」

「遠くギリシアにおける世界観の哲学的探究の一帰結に端を達して、今日の科学技術を現出させる至るまでの人間の努力と営為は、詮ずるところ、生物的本能を超えて人間に与えられた「理」（ロゴス）追求の能力が、常識に誘導されてふたたび生物的本能の指示するところをそのまま理論武装することに向かったとき、そこからどのような事態が現実の結果することになるかを見届けるための、息の長い壮大な実験であったといえるだろう。実験は成功し、しかもいままなお継続中である。現代の科学技術文明のなかで、われわれはその被験者として生きている。」

「いずれにせよ、上述の「実験」によってもたらされた事態がいま間違いなく告げているのは、もはやこの実験をこのままの状態で行へ進めることは許されないだろうということであり、そのことに人びとが気づき始めたこと自体が、実験結果の一つなのである。現代文明のなかでわれわれは、このまま被験者でいることはできない。現代の状況とそれが露呈している危機的構造は、いまこそわれわれ自身がまったく異なった別のコンセプトのもとに、これまでの単一な直線運動の方向と軌道を根本的に修正するための新しい「実験」にとりかかるべきことを、強く要請している。」

私たちは世界観という
器のなかで生きている

器の中に入らないものは
観ることができない

見ることのできる光と
見ることのできない光

聴くことのできる音と
聴くことのできない音のように

私たちは意識さえしないで
世界観という檻に住んでいるのだ

科学はやがてすべてを解明するといえば
科学がすべてだと思えるようになる

信仰がすべてだといえば
信仰なしでは生きられなくなる

死は終わりだといえば
死は終わりとなる

自分がどんな檻に住んでいるのか
それを知ることはむずかしい

だからときおり狂気を招いては
自分と世界を壊してみたくもなるのだ

mediopos-286

2015.8.29



■アンドレ・モーロワ『アラン』（みすず書房 1964.11）

「世人は、かれの故意の楽天主義を非難した。「目をつぶったあの希望、あの自己に対する嘘」と。それは要するに、かれが外的な事件をも外力の世界をも信用せず、恐れもしなければ敬いもせず、ただかれ自身の意志に、そしてかれの兄弟たる人間たちに信を置いたからである。それは本当だ。アランは楽天主義者であることを望む。不敗の楽天主義を規律の規律として身につけなければ、たちまち最悪の悲観主義が正当化されるだろう、それが人間の条件というものだから。なんとすれば絶望は、またおよそ人間があまりこむ不機嫌は、不幸と挫折のもとだからである。落ちそうだと、と思えば落ちる。何もできない、と思えば何もできない。人間の理法において、私が上天気と嵐を作りだす。(・・・) 隣人を不誠実と決めつけて不信を示せば、その人を不信に、不誠実にする事になろう。聴衆を軽蔑する演説者は聴衆に軽蔑される。ソクラテスは、卑小な奴隷にもすべてを理解する能力があると信じていた。だからかれは奴隷に理解されたのだ。／人間にその奴隷状態よりは自由について語りかけること。恐れよりは希望を教えること、これが賢者の秘訣である。幸福であることをわが心に誓うべきだ。(・・・) 自分をあざむくとか、目をつぶって希望するとかの問題ではない。外力の世界は、敵ではないとしても、盲目であり恐ろしい。アランはそのことを知っているのだ。しかしまた、外力を飼いならし、手綱をつけ轡をはませた人間がひとりならずいることも、かれは知っているのだ。人間の不幸をひき起こした大罪人は、周囲の世界ではなく人間自身である。というより、皮袋のなかに賢者と同居している例の人間の一部分である。／アランは、筋肉と思考の適当な訓練によって、高次を低次で支えうることを示した。人間をばか者扱いをすることを、かれはつねに拒否してきた。人間の欲望を咎める代りに、その欲望に感情を、社会を、芸術作品を接木することができるのだと言ってきた。人間古来の信仰を笑う代りに、そこにはすでに、粗削りだがいくぶんの叡智が含まれていることを示してきた。錯誤は人間的なことである。錯誤をなくすることはできない。だが、乗り越えることはできるのだ。真理はすべて錯誤から生まれた。観念は、ただ人がそれに満足するときのみ虚偽となる。折れた棒は、棒が折れたかと思つてすまず人にとっては錯誤である。それに満足しない人にとっては、その虚偽の知覚が真実な光学の法則への導きの糸となる。疑い、そして信ずるすべを、疑い、そして行動するすべを、疑い、そして意志するすべを知る者は救われる。ソクラテスは死んでいない。かれはいま、郊外の小さな家で、机にむかって坐っている。白髪急進派として。そうであることを矜持として。」

人は大丈夫である
十二分に自由であり得る

人は間違ふことができる
間違つた後のことを考えることもできる

人は疑ふことができる
だから信じることもできる

人は大丈夫である
錯誤のない人はいない

人は高次と低次の複合体
高次であるためには低次でもあることが必要だ

人は不幸を感じる事ができる
けれどそれを幸福のうちに生きることもできる

人は大丈夫である
ならぬようにはならない



■アーサー・ビナード『日々の非常口』（新潮文庫 平成 21 年 8 月）

「イソップにはこんな話がある。／ギリシアの神プロメテウスが、ニンゲンという生き物をこしらえ、形がほぼできあがったところでずらずら並べ、一人一人の肩に二つの袋をかけた。一つの袋の中には、本人の欠点がいっぱい詰められ、もう片方の袋には、他人の欠点がいろいろ入れられた。そしてプロメテウスのかけ方では、他人欠点の袋を前に、胸のほうで運ぶことになり、本人の欠点は後ろに、背負うことになった。そのためニゲンは、自分以外の人の欠点がいっでも目につき、簡単に見つけられるが、自分自身の欠点には、なかなか気づかないのである。（・・・）／むかし、この「ニンゲンの欠点袋」の話を知らせてもらった際、ぼくは逆に美点のほうをつめた袋は、どこかにかけてあるのかなあと思った。そのことについてはどうやら記録が残っていないようだが、不感を過ぎて少しだけ分かってきた気がする。他人の美点や長所の袋と、自分自身のそれも、ひょっとして両方の脇の下あたりに抱えている感じじゃないだろうか。その一部分は目に入るが、ちゃんと確認しようとするなら、まず頭をさげないといけない、ふんぞり返ったままだが、左右とも大部分が死角に入る。」

ニンゲンという生き物は
なかなか苦勞が多い

自由であろうなど
自分では思っていなかったようだが

神は自分にできないことを
ニンゲンに背負わせてしまったそうだ

だからいろんな間違いを犯してしまう
自分を棚に上げて人の欠点ばかりが目についてしまう

ふんぞり返るのが好きで
ふんぞり返りすぎて転んでしまったりもする

自分で迷路をつくってそこをさまよい
抜け出せなくなってしまったりもする

けれど転んだあと起き上がることもできるし
迷路を自分で抜け出すことだってできるのだ

目をつぶることもできるけれど
目をあけることだってできる

耳をふさぐこともできるけれど
耳をひらくことだってできる

やたら苦勞ばかり多いけれど
眞の自由の名において！

mediopos-288

2015.8.31



■高遠弘美『七世 竹本住太夫／限りなき藝の道』（講談社 2013.9）

「義太夫語りという仕事が特別に思われるのは年齢にも関係があります。同じ文楽でも人形遣いや三味線弾きは、五十代でも、人によっては四十代でも頭角を現す場合がしばしば見られます。歌舞伎や能楽師は多くが家々の相伝です。若くして実力を発揮する人が少なくありません。音楽家も五十歳になる前から一流になる場合が多いでしょう。歳を重ねるごとに、それも六十を過ぎてからぐんぐん良くなったのはヴァント以外にそうはいないような気がします。古典落語は少し違うでしょうか。これは私の偏見かもしれませんが、現代若手で活躍する人気の噺家はたとえば、六十歳を過ぎてからますます円熟の境地に達した古今亭志ん生や桂文楽、三遊亭圓生、林家彦六（八代目正蔵）や桂米朝らと比べるとまだ彼らの深みは持ちえていないと思いますし、古今亭志ん朝や金原亭馬生（十代目）はまだこれからというときに世を去りました。立川談志はライブの面白さは群を抜いていても、録音で聴く限り、しみじみとした老熟は感じられません（もっとも、談志の場合は老成をはじめから拒んでいたという面があるのでしょうか）。／そういうなかで、義太夫語りは老熟しないとても底が浅くて聴けないという、きわめて特殊な職業です。昔ならとうに定年になる六十歳を過ぎないと一人前になれない職業がほかにありませんか。」

「普遍的な芸術は、それを享受する側の精神をのびやかにします。たとえ悲劇的な内容だとしても、住太夫を聴いたあと私はしみじみと人間という存在がいとおしくなります。心身ともにさわやかな感じに包まれます。それはアリストテレスが『詩学』で悲劇について語った「カタルシス（浄化作用）」にも通じるのでしょうか。」「何ごとにも若さを求め、老成を見ようとする現代にあって、住太夫は歳をとることのすばらしさを身をもって体現し、私たちに静かに示しているのです。」

生きるということは
道に行くということだ

歩みをとめたところが
その人の終の場所になる

二十歳で止まれば
止まったところで退行がはじまる

歩み続けるならば
死のときまで熟成は続く

歩みながら歳をとるということは
熟していく限りない神秘の技だ

そして死は終わりではない
生がただのはじまりではないように



たとえ明日世界が滅びてしまっても
明日の種を植えることをやめはしない

たとえ明日死んでしまっても
私という種を植えることをやめはしない

この一歩はすべて新しい一歩である
この道はすべて新しい道である

私という貧しい旅人は光の記憶をたどり
私という画布に未知の道を描いてゆくのだ

■立野正裕『紀行 星の時間を旅して』（彩流社 2013.9）

「ある日、楽園で人参の種を蒔いていたフランチェスコに向かって、通りがかりの旅人がこう尋ねた。／「もし来週、世界が滅びて、その人参が食べられないと知ったら、あなたはどうしますか」／すると、フランチェスコは答えた。／「それにもかかわらず、わたしは、わたしの人参の種を蒔き続けよう」／『オリーブの森のなかで』でこの逸話を語ったのは、ミヒヤエル・エンデである。（・・・）／――過去のいつの時代にも、人間は絶望すべき理由を十分に持っていた。人間の歴史は、血と涙の痕跡にほかならない。「それにもかかわらず」人間は信じることを止めず、愛することを止めず、希望することを止めない。それはどうしてか。納得がゆくように説明することは、だれにもできない。それはただ、人間によって実践される。／エンデはそう語った。／もしも、来週のうちに世界が滅びてしまふと知ったら、わたしはどうするだろう。その問いに、今日依然としてわたしは答えられない。それゆえ、いまなおわたしは旅を続けている。。」

「既成の自己に別れを告げ、未知未聞の自己に向かって探求の旅に出発する者、あるいは「こうありたいと望む自分」の創出を目ざして、一步一步よるべき道を辿る勇気を持つ者。またあるいは、新たな自己を再構成するという清新かつ重大な事業をわが身に引き受ける者、そういう者こそ閉塞した時代を生き延びる果敢さをそなえた人間にちがいない。なぜなら、「現在あるものを踏み越えてゆくこと以上に、人間的なことはない」のだから。」

「流れる星、それは一瞬のなかを通り過ぎる永遠である。／その存在は時間のなかで消滅して行くが、／光の記憶は残るのだ。／こうして画布に照らし出された風景は、／芸術だけがわれわれにもたらし得る／自然のなかの自然、／自然のなかの光である。／おそらく光の記憶にほかなるまい、／のちの世のわたしという貧しい旅人の／心の道を照らすのは。」



■青山二郎『眼の哲学／利休伝ノート』（講談社文芸文庫 1994.3）

「そこで一体贋物は社会に害を及ぼすだろうか、そんなことを考えてみましょう。そんなら政府の力でもまた何の運動でも結構ですが、贋物という贋物を一切切なくしてしまったら世の中どういうことになるでしょう。贋物は自然に消滅するという説があります。これは正論です。昔からいいものはどうしても残って、悪いものは無くなっていきましてけれども、しかしそれ以上の勢で何時の時代でも贋物は制作されていくことも確かで、新しい贋物だけで——そういうものだけで現代人の眼が見えなくなっていくことは——そういうことも考えなければならないことだろうと思います。／先ず品物の方からいいますと、贋物というものは一番人が憎むのは、兎角、金銭の問題から、そういう問題が絡むから悪いといえます。贋物と承知で売ったり買ったりする人もいる。だから世の中には千円の雪舟もあれば、一万円の雪舟もあります。十万円の雪舟もあれば百万円の雪舟もあります。美人も美人でない人もいます。ところがそういうものを何かに利用しようという人は、そういう人間は山師だから、そういう人間も一切いけないかという、そういうことがいけなかった日には、世の中には「尊い一票を入れましょう」という人間ばかりになって了う。恋愛だってそうでしょう。美人がそのまま人間の内容だったら世話はないのです。そうかといって、人間はけして内容を先にして惚れるものではない。だから、そういうことは甚だ矛盾しているようですが、見た目惚れる方が本当で、これは何とも致し方ないことです。してみると大概美人などというものは贋物だということになるが、そこがまたそれとこれとは全く別のものなのです。それは騙された方が欲張っているからではないのでしょうか。千円の雪舟もあれば、一万円の雪舟もあるんですから、千円の雪舟を買って騙されたと思う人もあれば、一万円の雪舟を買って一杯食われたという人もあるんです。ところが百万円の雪舟を買ってもいけないのもあれば、十万円の雪舟でそれがいいということが分かる人もいます。」

「だから贋物位におどかされて自分を喪う程、そんな虚栄心は私にはありません。知らないものは知らない、分からないものは分からない、詰まらないものは詰まらないで沢山ではありませんか。ただいくつになっても、自分だけに話しかけてドキンとするのが年の功の楽しみなんです。／あらゆる専門家、専門家といわれているそういう贋物の専門家の面白さも、それを週刊誌がどうこういっても、私にすればまあ「亦楽しからずや」といえるのではないのでしょうか。」

贋物が本物かではない
自分が何を選んだかである

騙すか騙されるかではない
自分が何を好んだかである

贋物本物に惑わされるなけれ
騙す騙されるを恐れるなけれ

知らないものは知らないままに
分からないものは分からないままに

好きなものを自分で選ぶ
亦楽しからずやではないか



知恵なきゆえに 鬼となり
知恵に使われ 鬼となる

恨み辛み妬み嫉みを 種として
額に見えぬ角生える

恐れに縛られ 鬼となり
呪いを吐いて 鬼となる

おのれを逃れて 鬼となり
神にすがって 鬼となる

恐ろしきは 人なり
愛すべきも 人なり

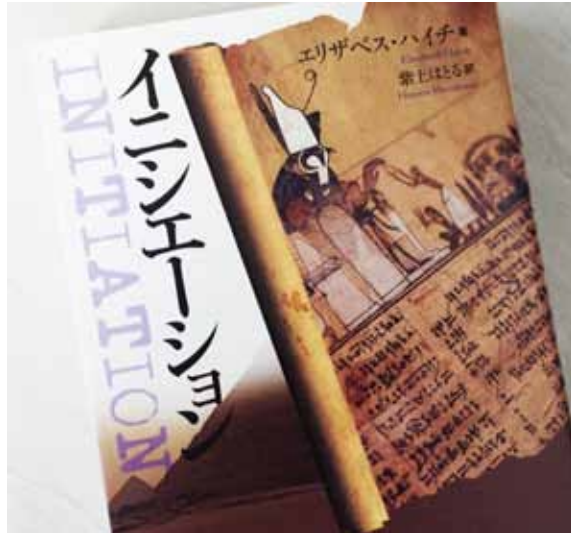
おのれを救うは おのれぞ
人をおのれを愛するは おのれぞ

■西條奈加『千年鬼』（徳間文庫 2015.8）

「鬼の芽は、鬼ではなく人に宿る／恨み辛みを糧として、ときにゆっくりと ときにひと息に 身内にそだつ／やがてその実がはじければ 額に日本の角をもつ 人鬼となる／げに恐ろしきは 鬼ではなく この人鬼なり」

「恐れは呪いとなりて人を縛り／人は逃れんがために神にすがる／社を設け 堂を建て 形代が前に額衝かん／なれど 人を救うは神にあらず／恐れを払うは畏れにあらず／虞 すなわち慮りこそが 唯一恐れを遠ざけん」

「天上人は まず鬼を造り 後に人を生した／鬼には力を与え 力なき人には知恵を授けた／悪鬼とは知恵の果ての姿 すなわち人鬼なり／善悪も罪も 人の世だけの理に過ぎず」



■エリザベス・ハイチ『イニシエーション』（ナチュラルスピリット 2015.8）

「私がこの人生で、地上の物質世界で体験している「現実」のすべては、はるか数千年前、すでにピラミッドのイニシエーションで体験していたことだったのだ。あのとき、それらはまだ無意識の中の眠れるエネルギーとして、すなわち純粋な原因として、魂の深みに潜在していた。この地上で起きることはどれも、霊的な世界において顕在化を待っている「原因」が具現化したものだったのか。ゆえに人が意識的に＜自己＞の奥深くまで到達し、顕在化を待つそのエネルギーに触れることができれば、「原因」と同時に「結果」すなわち未来を体験するのだ——完結し成就する現在として。

現在の自分の人生に起きてくることのすべてが、イニシエーションの試練や課題をやりとげる機会なのだ。それは、思考や言葉やふるまいによって時代から時代へと内にため込んできた緊張をゆるめ、抑圧を解き放つ機会だ……人間の意識はそんな緊張と抑圧のエネルギーに縛られてきたために制限されており、そのエネルギーがまた私たちの運命の原因となって未来をつくる。こうした緊張や抑圧に意識的に気づいて打開していけばいくほど、私たち人間の意識は自由になり、それぞれの個人的な自我感覚を超えた奥で私たちを待つ、真の＜自己＞に意識を同化することになる……そして私たちは神と一つになる。／これが「イニシエーション」だったのだ。」

この今の体験には種があり
それが花をつけ実っているのだ
それがどんな痛みを伴い
たとえ悲劇であったとしても

霊的世界で蒔かれた種は
みずからの自由において
芽を出し葉をつけ花になり実をつける
そしてその実が種として蒔かれる

運命は宿命ではなく立命である
運を運ぶのはみずからである
種を育てるのはみずからである
原因と結果はともに今の体験の奥深くにある

なぜ霊界は地上世界を必要としたのか
新たな花を咲かせるためではなかったか
自由の種を蒔くためではなかったか
それがどんな試練を伴うものであったとしても



■小野正弘『感じる言葉 オノマトペ』（角川選書 平成27年8月）

「オノマトペの、言葉としての基本的な仕組みを確認しておこう。まず、オノマトペには、その中核となる素材がある。本書では、これを「オノマトペの基本要素」と呼んでいる。たとえば、本書に出てくる、「ふわふわ」の「ふわ」を例にとってみよう。現代では、この「ふわ」は、「ふわっ」「ふわり」「ふわん」「ふわふわ」などというように展開することが可能である。この展開は、「っ」（促音）、「り」、「ん」（撥音）、繰り返しなどによって行われる。さらに、「ふわ」には、「ふうわり」のように、のぼす音（長音）をあいだに入れることも可能である。またさらに、「ふんわり」のように、「ふわ」のあいだには撥音「ん」を入れることも可能である。そして、「ふわりふわり」「ふわっふわっ」「ふわんふわん」のように、一度造ったオノマトペをさらに繰り返して展開することも可能である。このとき、「ふわ」という要素が、それぞれのオノマトペの中核となっていることが見てとれよう。」

「『いら』の<とげ>という意味をうけついで『いらいら』は、当初それが前面に出た<とげ状のものが多くある様子>を意味していたが、必ずしも、<とげ>そのものでなくても<とげに似た感覚>であれば使えるようになり、さらにそれは、<熱気や日光>のようなものでも使えるようになった。そして、心がなんらかの刺激を受けて平穏でいられないという感覚を表すようになる。この感覚は、それまでにもあった『いらいらし』と共通するものであった。このくうるさいほど気に掛かって平穏な気持ちでいられない様子>という感情が前面に出たものが、現代語の『いらいら』ということになる。」

「現代語で『わくわく』と言えば、<なにかの期待に胸がふくらみ、気持ちが高ぶる様子>のような意味で用いられている。しかし、このような意味になったのは、ごく最近のようである。『わくわく』は、近世から用いられているが、現代における意味とは異なっている。〔*近松門左衛門『釈迦如来誕生会』の例〕／ここでの『わくわく』は、いくら急いでも、道がなかなかかどらず、<気があせて落ち着かない様子>を表している。（・・・）〔*夏目漱石『それから』の例〕意外なことに、夏目漱石も、『わくわく』は、<期待や希望のために気持ちが高ぶる様子>ではなく、単に<気持ちが乱れて落ち着かない様子>で用いている。現代様な『わくわく』は、大正時代のころから見出せるようになり、そして、だんだん優勢になっていくようである。」

ぐずぐず

聞こえない音が聞こえる

いらいら

聞こえない音が聞こえる

わくわく

聞こえない音が聞こえる

心が言葉の形になって

聞こえてくるのだ

はらはら

聞こえないけれど ときどき

でれでれ

聞こえないけれど めろめろ

きらきら

聞こえないけれど ぴかぴか



■尹雄大 監修・光岡英稔『FLOW 韓氏意拳の哲学』（冬弓舎 2006.10）

「変化し続けるとは、「いまの先はわからない」という生の当たり前の事実である。そうした世界で主体的であるとは、どういう状況であっても「可能性を生きる」ことを意味するだろう。可能性とは未知の別称でもあり、未知とは新たなことなのだから、過去を参照して判断することはできない。／過去に得た認識によっては、未知を把握できないという不可能性を、人は絶望と呼ぶかもしれない。けれど、そうではない。「把握することができない」という不可能性は、逆に可能性を示している。というのは、認識の外に未知は広がるのだし、そもそもそれを認識し、既知に置換する必要など本当はないからだ。／未知とは可能性の別称である。わからないことが、わからないにもかかわらず、この先の運動の中に展開し、次々と生起してくるのだから。それは予想を超えた働きであって、だから認識の不可能性とは運動の可能性にほかならない。そしてこの運動のことを、人は「生きる」と呼ぶ。いま生きていることは、認識に還元できない。だから人は、ただ生きる。／知り得ないことは、絶望ではない。認識や実感が得られないことは絶望を意味しない。それらを得ることは、希望でもない。それらはもとめるべき答えではなく、未知に向けられたヒントであり、問いなのだ。韓氏意拳でもとめるべきは答えではない。真、すなわち原理原則を問うことが求められるのだ。」

「不敗とは、自身と和解するところにあるのではないか。それは、克己心という精神論では決して得られない。和解とは、ただの自分になることで、それによって円満さがもたらされるのなら、その自己には縦びがないだろう。なぜならそこには、問題も善悪も是非も存在しないからだ。／大人になると、「ただそうある」ことでなく、「そうあらねばならない」ことを一人前の態度だと思いがちだ。けれど、はたしてそれを成熟と呼べるだろうか。というよりも、分別の枠の中に分類されることのない世界は、「ただそうある」ものとして存在するのだから、「そうあらねばならない」と思い込むことは、可能性に目を閉ざし、成長を拒否することにしかならないのではないだろうか。」

「ただ存在する営みとは、ただ「いま」の平常を生きることだ。「いま」の「いま」は「たったいま」にしか存在しない。「いま」には、ただの自分しか存在し得ない。だから私たちの生、あるいは存在は絶対的であり、同時に限りなく自由でもある。」

既知の答えから
あるべきを未来に投げて
希望と絶望を往還するのか

過去は過ぎ去り
未来は未だ来ず
ただ存在するは今

無常は可能性へ
問いは未知へと開かれ
今という平常の自由が生きられる

すべては常に新しい
知らないことは問いの運動となり
ただ生きることの深みへ



■永池健二『逸脱の歌唱 歌謡の精神史』（梟社 2011.9）

「ウタ（歌謡）は、集団的モノローグの一形態である——かつて寺山修司は、ウタという表現形式の特質をこう規定してみせた。ダイアローグを基本とするドラマに対して、ウタは、対話者同士が言葉の遣り取りを通じて自己変革を遂げていくというようなダイアローグ的性格をその本質において欠落させた、自己完結的、自己充足的な言語表現だというのである。この寺山の刺激的な指摘を今日の歌謡研究の立場から言葉を換えて捉え返すとすれば、それは、「聞き手の不在」——歌とは聞き手の存在を前提としない言語表現である、ということになろう。」

「私見によれば、通じゃんせの遊びは、聖域の結界における通せんぼとその乗り越えを構造的に遊戯化した遊びである。「ここはどここの細道じゃ」。お宮参りらしい親子連れのかにも不自然な問い掛けで始まる歌の応酬。（・・・）「ここはどこ〜」という道尋ねの表現は、道行表現に類出する常套句であり、境界における地名喚起の表現である。一方、手を繋いで通せんぼをする二人の鬼は、境界において道妨げをする道祖神のごとき役割を担っている。（・・・）その際、通せんぼをする鬼＝道祖神の言葉も、お通しをする宮参りの親子役の言葉も、歌をもって発せられる。両者の言葉は、共に歌となって境界を越えて響き渡るのである。」

「不思議なことに、記紀に描き出された古代の歌の風景の中には、歌の「聞き手」は登場しない。少なくとも、「聞き手」が歌の場を構成する主体的役割を担って登場することはない。多くの記事では、単に「歌曰（歌ひたまひしく）」として歌を掲げるのみで、歌の後は、そのまま次の記述に移る。まれに「聞き手」が登場する時、それは、きまって、偶然に何かの都合でその場に居合わせて、その歌を耳にした者たちである。（・・・）／先に私は、聞き手を想定しない歌のかたち、聞き手も、共に歌う相手も、伴奏者も存在せず、ただ独り口ずさむ歌のかたちを「独歌（ひとりうた）」と名付け、それが歌謡の初源にも関わる重要な歌のかたちの一つであることを指摘した。いま、ここでは、それをさらに一歩進めて、「聞き手の不在」という「独歌」的な契機こそ、すべての歌謡に内在する普遍的な特質であると、改めて指摘しておきたい。それは、多数の人びとが一つの歌を声を揃えて唱和する合唱の場合でも、二方に別れて対峙し交互に歌を掛ける掛合歌の場合も、本質において変わらない。／例えば、卒業式の場でうたう校歌や「蛍の光」の歌声ははたして誰に向かって発せられたものか。むろん、それは、壇上に居る教師たちや参列した多数の父母たちではありえない。ちょうど古代の天皇が山の尾上に立ってうたう国見歌が、その場に従う供人に対してではなく、誰もいない中空に向かって放たれたように、そこには、具体的な聞き手は存在しない。あえて言えば、歌は、その式典に参加するすべての人が共有している場の共同性に向かって放たれる。結果、その歌声はその場の共同性を共有している歌い手たち独りひとりの胸に帰ってくるのである。」

歌は独りで歌うもの
聴く者もなく歌うもの

二人で歌うも独り歌
みんなで歌うも独り歌

独りの歌であることで
独りのみんなの歌となる

祈りは独りで祈るもの
聴く者もなく祈るもの

二人で祈るも独りの祈り
みんなで祈るも独りの祈り

独りの祈りであることで
独りのみんなの祈りとなる

mediopos-296

2015.9.8



■西川美和『映画にまつわるxについて』（実業之日本社 2015.8）

「誤解を承知であえて言えば、映画中の「聴いてもらうべき音」を「言葉」に直して字幕で観せる。「観てもらうべき風景」を「言葉」に直してアナウンスで聴かせる、という作品の披露の仕方というのは、本来私の目指した表現としては不完全であることは否めない。「ストーリーが解ればいい」「大体でいい」のであれば、一切合切、大体でいい、ということになる。そんな感覚ではワンカットも作っていない。不完全なものを提供しているのか、という大きなジレンマがある。しかし、この不完全さの根幹は、こちらが聴かせようとしている音を、観客が「聴きとることが出来ないこと」ではなくて、聴かせようとしている音を、「言葉＝記号」に置き換えていることなのだ。私は、言葉の威力というものが怖い。ガイダンスや字幕のように短いセンテンスになればなるほど、描写力のエッジは強くなり、ずばりと型にはめていく靈力に似たものを発揮する。それゆえに、「言葉」に圧倒され、潰されていくのだ。映画の中の、「得も言われぬもの」が。それこそが、私たちが、死にもの狂いで捉えている映画の真骨頂なのに。」

林檎を林檎という言葉で表すとき
林檎は林檎であることを伝えるだろうか

私を私という言葉で表すとき
その言葉ははたして私だろうか

言葉は言語ゲームのように
なにかを指し示してはいるだろう

林檎を買ってきてといわれて
林檎を買ってくることはできるだろう

けれど林檎という言葉になったとたんに
失われてしまうなにかがある

私はいまここにいるよ
ということはできるだろう

けれど私という言葉になったとたんに
失われてしまうなにかがある

失われてしまうなにかのために
いったい何ができるのだろうか



■丸山宗利・養老孟司・中瀬悠太『昆虫はもっとすごい』（光文社新書 2015.8）

「養老：今の人は、因果関係がはっきりしていて明確な答えがある状態じゃないとイライラしちゃうんだよね。深く考えることをしないで、わかりやすい答えに飛びついちゃう。ミツバチの話だって、何も農業の仕業だけじゃないんだよ。ダニの影響もあるし、ウイルスの問題もあるはず。けれど、すぐに「じゃあ、結局どれがいちばんの問題なの？」という考え方になるでしょう？ 自然なんて多様性が絡まり合っていてできているようなものなんだから、決めつけないで適当なところで収めるしかない、ということを理解できればいいんだけど。／虫に限らず、今の人たちは外に出て自然と触れ合う機会が少なすぎるんじゃないかな。イヌでもネコでもトリでもいいから、生き物と自然環境に接してほしい。お日様が出て、だんだん陰って、風向きが変わって、温度が変わる。そんなの高層ビルの20階に籠もっていたって感じられないでしょ？／丸山：知り合いの編集者の方が面白いことを言っていました。彼によると、最近アメリカのIT企業は高層ビルに入らなくなってきているそうなんです。アップル、グーグル、フェイスブックは全部フラットオフィスになったそうですよ。アマゾンなんて、シアトル本社にバイオスフィア2(・・・)のような球形の温室をつくって、その中に植物を生き茂らせるそうですから、世界中の山岳地帯の生態系をモデルにするとかで。／養老：へえ、それは気持ち悪いな。／中瀬：縦方向に伸びていった反動ですかね？ アメリカ人らしいけれども。／養老：ニューヨークでは働き盛りの人が、仕事の前にわざわざセントラルパークでジョギングするんですよ。そんなに自然のなかで走りたかったら、モンタナで木こりでもやればいいのと思うんだけど。日本だって、皇居の周りを走っているから同じようなものだけでも。(・・・)／しかもさ、マスクしながら走っているの。たぶん花粉症なんだろうけど、そこまでして緑の周りをぐるぐる走るなんて、もう末期だと思ったね。みんな、本当の自然を知らないからあんな環境をありがたがるんだよ。／丸山：まあまあ(笑)。でも、たしかに都会の公園は植えてある木もつまらないですもんね。全然虫のことを考えていないし。」

わからないものはおもしろい
おもしろいから考える

考えてもわからないから
ときには虫などを愛でに行く

わけのわからないことを生きると
そこから知恵が育ってくる

単純な原因と結果だけしか見えないと
見えないものが声をあげてくる

声は聴かれるまで叫ばれる
聴かないほどに叫ばれる

わからないなりに聴けばいい
聴けばそこから知恵になる



■大島幹雄『<サーカス学>誕生／曲芸・クラウン・動物芸の文化誌』（せりか書房 2015.6）

「エンギバロフの作品には、いつも笑いと悲しみ、喜びと哀しさが同居していた。なにかに挑戦しようという若者が、困難さを克服して、やっとなし遂げたと思うのも束の間、またドチをしてしまう、そんなオチの作品が多い。心の底から笑えるのだが、どこか哀愁が漂う、そんなクラウンの世界をつくった。笑いだけでなく、人生の一コマが垣間見えてくる。ヴィソツキイがエンギバロフに限りない愛を感じていたのはそんなところだった。ヴィソツキイの詩「綱渡り師」は、生と死のあいだを揺れ動きながら、観客の視線も取り入れ、笑いをつくることを使命とするクラウンへの、自らも詩人であり、歌手であるヴィソツキイの共感が込められている。／エンギバロフはヴィソツキイとほぼ同時代を生きた。スターリンが亡くなり、雪解けという一時的な解放の時代がソ連に訪れた時でもあった。そんな時代をエンギバロフは、風のように走り抜けていった。

*エンギバロフ賛

笑わせるためには
どれほどの悲しみが
そこに込められているのだろう

困難の先のドチには
どれほどの精確さが
そこに込められているのだろう

さりげない動きには
どれほどの激しい動きが
そこに込められているのだろう

生きているということのなかには
どれほどの深い死が
そこに込められているのだろう



■フリーマン・ダイソン『多様化世界／生命と技術と政治』（みすず書房 1990.5）

「この急ぎ足の宇宙旅行は、超弦で始まり、蝶で終わる。途中に二つの中間駅がある。ダンテの「地獄篇」の旅のように、各段階に数名の華やかな俳優が登場して、さもなければ荒涼とした舞台に人間的興味を添える。私は、蝶と超弦が何ものであるかは説明しないつもりだ。蝶を説明することは不要だ。誰でもそれを見たことがあるのだから。超弦を説明することは不可能だ。誰もそれを見たことがないのだから。しかし、私がみなさんを煙に巻こうとしているのだとは思わないでいただきたい。超弦と蝶とは、宇宙の二つの異なる側面、二つの異なる美の概念を例示するための見本である。超弦が始まりに来て、蝶が終わりに来るのは、この二つが極端な見本だからである。蝶は具体性の極致に位置し、超弦は抽象性の極に位置する。この二つは、科学が支配しうる領土の限界を表わす。どちらも、互いに異なる意味で美しい。どちらも、科学の立場から見ると、ろくにわかっていない。科学的に言えば、蝶は少なくとも超弦に劣らず神秘的である。ものごとは、それが神秘的でなくなると、科学者の興味をひきつけはなくなる。科学者が考えたり夢想したりするものは、ほとんどすべて神秘的なものである。」

「科学と神学との間の無人地帯には、信仰と理性が衝突するようにみえる特異点が五つある。その五つは、生命の起源、人間が自由意志を経験すること、科学では目的論的説明が禁じられていること、説明原理としての摂理論、究極目的があるかという問題である。」

*摂理論：宇宙に秩序が存在することの原因としての神の企図を主張する説

見えないものだけが
神秘的なのではない
見えるものもまた
かぎりない神秘である

見えるものと
見えないものは
メビウスの輪のように
つながって私たちを魅了する

不思議なのは
なぜ私たちは知ろうとするのか
ということではないか

私たちは知ること
知らないということを知ることにもなる
知ることが
いったいなんなのかを
問いつづけながら



■野内良三『無常と偶然／日欧比較文化序説』（中公選書 2012.7）

「縁起説は多義的な偶然に大きく開かれている。偶然に期待し、偶然を待ち構える。そして、自分にとって好ましい偶然なら積極的に受け容れる。偶然を積極的に受け容れる縁起観はプラグマティックだ。外から来る他者<偶然>を是々非々で受け容れるスタンスだ。「他者の措定」は新しい世界へ回路を通じる。新しい世界へ窓を開く。「他者」によって「自己」を知ろうとすることである。従来の消極的＝否定的な縁起観ではなくて、この積極的＝肯定的な縁起観を「容」偶然主義と呼ぶことにしよう。（・・・）「偶然を積極的に受け容れるスタンス」という意味である。／偶然は他者という形で「私」という同一性に闖入してくる。それは人である場合もある。自己という他者の場合もある。対称は人間に限らない。物である場合もある。絵画、音楽、書物などさまざまだ。そしてこの出会いは、なんの前触れもなく起こる。偶然には好意的なものもあれば、悪意的なものもある。大きな偶然もあれば、小さな偶然もある。とりわけ小さな偶然に敏感になる必要がある。／それでは、好意的な偶然を呼び込むにはどうしたらいいのか。／偶然は「今・ここ」での生起である。偶然は同時原因のたまものである。偶然としての他者は多義的である。多義的な偶然をしっかりと読み取らなければならない。そのためにはどうすればいいのか。日々の一瞬一瞬を完全燃焼的に生きることだ。好意的な偶然を感じ取る鋭敏なアンテナを張り巡らしながら。自分の夢、理想、願望をい抱きつつ待つ。ただひたすら待つ。しかいながら、<我>という固い殻（壁）を取り払って、他者という偶然をあたうかぎり受け容れることである。／好意的な偶然を予想することはできない。偶然の正体は分析的認識（ロゴス）では把握できない。だから待たずして待つのである。起こってみて、はじめてそれと知ることができる出来事がある。「今・ここ」。同時原因。多義性。偶然とは偶然であって偶然でないものである。偶然を感得するのは、事後的な「賢慮」（フロネシス）である。／外から来る他者（偶然）を是々非々で受け容れるしなやかなスタンス——これが「容」偶然主義である。「容」偶然主義においては多義的な偶然をどう読み解くかが鍵になる。」

偶然は来る

なぜ来るのか

否応なく来る

ならば

偶然を今ここで

待とうではないか

しなやかに

かるやかに

受け容れ

その多様な形を

しっかりと

楽しみながら

読み取ろうではないか